別紙　2

論文審査の結果の要旨

論文題目　「日本語物語テクストにおける「視点」――前近代の＜超越的・重層的視点＞と近代の＜中心的視点＞」

論文提出者氏名　　朴眞秀

本論文は、日本文学における叙述様式の特徴を、テクストに内在する視点を分析することによって解明しようとする試みである。それ故に、本論文で分析されるのはテクストをテクストとして成立させている構造的特性であり、それをいわば「ナラトロジー」的観点から明らかにしようとしている。分析の対象となっているのは『古事記』、『日本書紀』という古代日本の神話・歴史書、『竹取物語』、『源氏物語』、『平家物語』という平安時代、鎌倉時代の物語、そして『浮雲』、『蒲団』、『心』、『夢十夜』という近代日本の小説である。今日、そうした広い範囲を博士論文で取り扱うことは稀であるが、氏は視点構造という一点に議論を集中させることで、そうした広い範囲のテクストを扱うことを可能にした。ナラトロジーは「物語論」、「物語学」とも訳されるが、テクストの内部的構造を明らかにしようとする学問であり、主としてフランス・アメリカにおいて精力的に研究されてきた。しかし、欧米の学者が取り扱う範囲は、西洋文学が中心であり、さらにその中でも近代の小説に焦点があてられている。氏はそうした現状を不満に思い、ナラトロジーが扱う対象を広げることで、この学問に対する貢献をしようとした。そのために氏が取った研究方法は二つある。まず日本文学という、西洋文学とは違う伝統を持つ文学についても、これまでのナラトロジー的接近方法がどれほど有効だろうかという検討、さらに近代日本文学と前近代日本文学とを比較することで、それぞれの特徴がどれだけ明らかになるだろうかという考察である。そのため氏はまずこれまでの視点論について研究史的概括をし、その上で氏なりの分析のための道具を用意した。氏によれば、視点論が往々にして混乱するのは、見ている位置と見られている対象とを同じ用語で説明しようとするためであり、その混乱を回避するためには、見ている位置を視点という用語で、見られている対象を焦点という用語で説明し、その区別を明確にすることが何よりも必要であるとされる。そのことでも明らかなように、氏は、専門家の特殊な造語を用いるのではなく、日本語の日常言語を再定義し、自分の研究に使える道具を準備した。それにより本論文はより広い読者にも読みやすいものとなった。そうした氏の態度は、これまでの研究を踏まえながらも、氏独自の観点をわかりやすく打ち出そうとする研究者としてのあるべき姿をも示している。

以下、論文の構成に即して、氏の議論を要約する。

本論文本体は大きく２部に分けられている。第１部は「視点論と日本の物語ジャンル」と題されて、その序章「物語における視点とは何か」・第１章「視点の文法」においては、本論文の問題設定、さらに、これまでのナラトロジーにおける研究史が概括される。氏が直接十分に参照できる文献は日本語、英語、韓国語研究書に限られるが、その限りで氏はこれまでの研究動向を丹念に追っている。特に英語による文献（翻訳書を含む）によって、

欧米の研究を咀嚼し、特にジェラール・ジュネットとシーモア・チャトマンのナラトロジー研究を参照することで、氏は自己の考察を深めている。その結果として、氏が独自に提案するのは、分析における視点と焦点の分離の主張、そして、テクストにおける視点の位置を、作中世界との関係から、視点が作中世界の中に位置する「作中視点」と外に位置する「外部視点」に二分し、テクストにおける焦点の位置を、描写の特質から、焦点が対象人物の内面にまで届く「内面焦点」と外部に留まる「外面焦点」に二分することであった。その４つの要素を組み合わせることで、氏はテクストの作中世界の認識を４つに類型化し、テクスト分析の道具としている。

第１部第２章以下はその概念を用いた、テクスト分析となる。第２章は、「古代神話と歴史叙述の＜超越的視点＞」と題され、『古事記』、『日本書紀』を扱う。これらのテクストは述べられていることが確かなことであると読者に保証する必要上、「外部視点」・「外面焦点」をとることになる。その点で『古事記』と『日本書紀』の視点構造は共通している。ただし、ナラティヴの特性の差異はあるが、どちらもその語りに正当性を与えるため、現実を越える超越性をテクストに付与し、それを実現するために「超越的視点」を設定しているのである。

第３章は、「中世物語の＜重層的視点＞」と題され、『竹取物語』、『源氏物語』、『平家物語』とを扱う。この段階において、いわばフィクションとしての文学という観念が表われ、語られていることを事実とする立場からの離脱が見られる。そしてその虚構文学としての性格を明示するための文体、藤井貞和氏の用語を用いれば「日本叙事文」が登場し、その虚構性が保証されることになる。そうした虚構としての物語における視点構造を分析してみると、依然として「外部視点」・「外面焦点」が大枠をなしているが、その中に「内面焦点」も見られるようになり、古代において統一されていた視点構造が揺らぎ、重層的な視点構造が見られるようになることが確認される。

第４章は、「近代小説の＜中心的視点＞」と題され、二葉亭四迷の『浮雲』と田山花袋の「蒲団」が分析される。この時期は文体に関しては言文一致運動が行われ、近代日本語文体が形成された時期であるが、そうした文体的革新についてはこれまで議論が多かったが、視点についてはそれに比して研究が進んでいたとはいえなかった。氏は、近代日本文学初期作品である『浮雲』のテクストを丹念に分析し、その中の視点が物語の進行に従い「外部視点」・「外面焦点」から「作中視点」・「内面焦点」に移行していくことを明らかにする。それは物語で描かれる世界が次第に縮小する過程と見事に呼応している。ただし、その転換は前近代の物語に比べるとより明示的であり、視点の位置はより安定的に確立されていると言うことが出来るであろう。それに対して『蒲団』はすでに近代日本口語文がかなりの程度確立された時期に書かれたものであり、すでに視点確立の問題は『浮雲』で決着済みであった。ただし、「内面」の描写という原理的問題とその具体的表現の問題はまだ解決されなければならない問題であった。

第２部は「＜視点の構造＞から＜視点の過程＞へ」と題されており、その中は４章に区分けされている。第５章「『心』のテーマと視点」は夏目漱石の『心』を扱った章である。氏は、『心』のテクストを分析し、そこにおける視点の位置について論ずる。『心』は複雑な時間構造を持つ作品であるから、そこにおける視点構造も複雑であり、氏が提唱する４つの視点構造の類型がそこにはすべて見られる。しかしその視点構造の変化は、作中の時

間構造の変化と対応しており、決して重層的なわけではない。『心』は近代日本文学作品としての「中心的視点」を備えてはいる。それに対して、時間的には前になるが、漱石の『夢十夜』は夢を描くという作品の性質上、そうした「中心的視点」から離脱する部分が出てくる。初めは全く「作中視点」から構成されていたものが、途中から「外部視点」が導入され、その枠内で「作中視点」も採用されることになる。

第７章「遠近法と視点」、第８章「構造から過程へ」は、そうした日本文学における視点構造の変化がどうして起こったのかという一考察であり、またこれまでのナラトロジーが軽視していた時間という要素に関する問題提起である。氏は、そこで、そうした近代日本文学における視点構造の変化、「中心的視点」への変化がヨーロッパに発生した遠近法とどのような関係にあったのかを考える。そしてその考察の後に、静的な性質を帯びざるをえない「構造」に時間的な要素を加え、「過程」という観点から文学作品を読み直すことを提唱し、日本文学の中に見られる非西欧的な要素の重視を主張するのである。例えば、連句のような視点構造はこれまで非近代的なものと見なされることが多かったが、そうした非中心性も文学作品の重要な要素として評価することを提案する。

もちろん、本論文はその扱う範囲の広さゆえに、個々のテクスト分析に関して言えば、たとえ視点構造という一点に絞られているにしても、まだ充分に行われてはいないという批判が審査委員の中から出た。またナラトロジーという、欧米で精力的に研究が行われている分野において、決定的な説を若い一研究者が提示すること自体、きわめて難しいことは明らかである。

しかし、本論文が、そうした問題点を抱えつつも、力作であることは疑いえない。以上述べたような大きな視野と展望とを示すため、氏は地道に文献を読破し、特に総合文化研究科で授業を担当する多くの研究者の関係する業績を学び、自分なりに考え、自己の主張の根拠とした。そこには、大学院で学び、そして自分なりのオリジナルな考えを提出するという課程博士として称揚すべき美質が認められることは明瞭であった。また審査員から指摘された欠点の多くは最終版を用意する時に十分手直しできるものであったから、審査員の指摘を踏まえ、欠点を補正すれば本論文は学界に学問的貢献をすることは確かであるというのが審査委員の一致した意見でもあった。

以上の点を総合的に判断して、審査委員会は、論文審査の結果として、本論文を博士（学術）の学位を授与するに値するものと判定する。